



Title	クレティアン・ドゥ・トロワ 『聖杯物語(ペルスヴァル)』 (1)
Author(s)	四反田, 想
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1989, 29(2), p.35-51
Issue Date	1989-01
URL	http://hdl.handle.net/10069/15254
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T19:36:16Z

クレティアン・ドウ・トロワ

『聖杯物語（ペルスヴァル）』（1）^{*1}

四反田 想

〉 Le Conte du Graal (Perceval)〈 de Chrétien de Troyes
— Traduction japonaise et commentaire (1) —

So SHITANDA

僅かしか播かざる者は僅かしか収穫しない、² [f⁰ 361 a]
しかし幾らかでも収穫せんとする者は、
そのような場所に自らの種を播くがよい
そこはその者に実りを百倍にして³齎らすのである。 4
というのは、何の実も結ばない土地では
良き種は干涸び、役目を果たさないからである。
クレティアン⁴は自らが始める物語の
種を播き散播する、 8
そして彼は非常に良い場所にその物語を播くので
それは彼の大きな利益と成り得て、
ローマ帝国に存在するであろう
最も高潔なる者のために彼がそのようにするほどである。 12
それはフランドル伯フィリップ⁵のことである、
アレクサンダー⁶でさえよりも彼は値打ちがある、
その者はそんなにも優れていたと言われているが。
しかし私は証明するであろう、その伯爵は 16
この者が真にそうであったよりも優れていると、
というのは彼は自らの内に蓄積したからである
全ての悪徳と全ての悪業を

- それらから伯爵は清浄であり自由である。 20
- 伯爵はそのような性質である、彼は耳を傾けることはない
野卑な嘲りにも傲慢な言葉にも、
そして他人のことを悪く言うのを彼は聞くと、
その人がその通りの人であろうとも、それは彼の感情を害するのである。 24
- 伯爵は正しい公正を愛し
誠実さと聖なる教会を、
そしてあらゆる卑劣さを憎む、
彼は人が彼を知っているよりも気前が良い、⁷ 28
というのは、彼は福音書に従って与えるからである、
偽善や欺瞞なしに、⁸
それは次の様に言っている。「汝の左手は知ってはならない
善を、右手がそれをするであろう時。」⁹ 32
善を受け取る者がそれを知るべきである、
またあらゆる秘密を見抜き、
心と内臓の中にある
あらゆる内奥に秘められた思いを知っている神と同様に。 36
- 福音書は、何故に次のように語るのか、
「汝の善き行ないを汝の左手に対して隠せ」¹⁰と。
左手は、言われる処に抛ると、¹¹
空虚な名誉を意味するが 40
それは不実な偽善に由来するのである。 [b]
そして右手は何を意味するのか。
それは愛徳であり、自らの善き業を
誇示せず、寧ろそれを秘密にしておくので、 44
誰もその事を知らない
神と愛徳と呼ばれるもの以外は。
神は愛徳であり、愛徳の中に生きる者は、
聖書に抛れば、 48
聖パウロがそれを語り私もそれを読んだが、¹²
神の中に宿り、神はその者の中に宿るのである。
それ故実際に確と知るがよい
その贈り物は愛徳に端を発しているが 52

それを廉直な伯爵が御与えになるのである、
 彼は決して誰にもその事を話しかけないということを、
 彼の高貴で寛大な心以外には、
 その心は彼に善を行なうように勧めるのである。 56
 この者はより値打ちがあるのではないか
 アレクサンダーよりも、彼は構いはしなかった
 愛徳にも如何なる善にも。
 真に、汝らはそのことについて全く決して疑ってはならない。 60
 従って確かに努力の成果を徒に失うことはないであろう
 クレティアンは、彼は専念し努めている、
 最良の物語に押韻することを、
 伯爵の下知により、 64
 その物語は主家の宮廷で物語られるのであるが。
 これは聖杯の物語である、
 それについて伯爵が彼にその書を御与えになる、
 それでは如何に彼がそれを履行するか、汝らは聞かれるであろう。¹³ 68

それは樹々の花が咲き、¹⁴
 森林は葉で覆われ、草原は青々とし、
 そしてそれらの鳥たちは彼らの言葉で¹⁵
 甘く朝に歌い 72
 そしてあらゆる物が喜びで燃え上がる時のことであった。
 その時、未亡人の息子が
 人里離れたガスト・フォレスト¹⁶の、
 起き上がって、そして苦勞することはなかった 76
 彼が自分の鞍を置くのに
 自分の狩猟用の馬の上に、そして手に取った
 三本の投げ槍を、¹⁷そしてすっかりこの出立ちで
 彼の母親の住居から外へ出て行き、 80
 そして彼は会いに行こうと思った
 彼女の母親が所有していた、馬鍬で耕す農民たちを、
 彼らは彼女の燕麦畑を彼女のために馬鍬で均しており、
 十二頭の雄牛と六個の馬鍬を持っていた。 84

そのようにして彼は森の中に入っていきが、
 そして今や彼の心は奥底から
 この穏やかな季節故に喜んだ、
 また彼が聞いた囁り故に、 88
 喜んでいた鳥たちの。
 これら全ての物が彼には気に入っていた。
 晴れた天気 of 穏やかさのために
 彼は馬から彼の手綱を取り外して、 92
 そのように馬に牧草を食べに行かせた
 新鮮な青々とした草を横切って、
 そして上手に投げる術を知っていたこの者は
 自分が持っていた投げ槍を 96
 周囲を歩き廻って槍を投げていた、
 ある時は後ろへ、またある時は前へ、
 ある時は下方へ、またある時は空高く、
 やがて彼は見た、森の真中を突っ切って 100
 五人の武装した騎士たちがやって来るのを、¹⁸
 あらゆる甲冑で飾り立てた者たちが、
 そして非常に大きな物音を立てていた
 やって来たこれらの者たちの甲冑が 104
 というのは、頻繁に甲冑にぶつかっていたからである
 楯と熊四手の枝々が。
 そしてどの鎖帷子も鳴り響いていた、
 槍は盾に突き当たっていた、 108
 槍の柄が響き渡り、鉄の部分が鳴り響いていた
 盾と鎖帷子の。
 その貴族の若者は聞きはするが見はしない
 並足以上の速さでやって来るこれらの者たちを、 112
 それで彼は不思議に思い、次のように言う。「誓って、
 真実を僕に僕の母、僕の貴婦人は言ったのだ、
 彼女は私に言った、悪魔というものは
 この世の如何なるものよりももっと恐ろしいと、 116
 また彼女は言った、僕を教育するために、

人は彼らに対して十字を切らなければならないと。
 けれども僕はこの教えを退けたい、
 というのは僕は真に決してそのために十字を切らないだろうから、 120
 むしろ僕はそのように全く最も強い者をつくだろう、
 僕が持っている投げ槍のうちの一本で
 その結果、決して僕に近付かないだろう
 他の者たちのうちの誰も、僕が信じているように。」 124
 そのように自分自身に言った
 その若者は、彼が彼らを見る前に。
 しかし彼が彼らを顔に見た時、
 彼らが森から出て来たのを、 128
 そしてきらきら輝く鎖帷子を見て [a]
 光り輝く兜を、¹⁹
 そして緑色と紅色を見た時
 日光に反射するのを、 132
 金色と紺碧色と銀色が、
 それは彼には好ましく気に入った。
 それから彼は言った。「ああ、主なる神よ、御慈悲を。
 僕がここで見ているのは天使たちだ。 136
 おお、真に、僕はある時はひどく罪を犯したし、
 またある時は僕は非常に悪く振舞った、
 それらは悪魔であると言った僕は。
 僕の母は僕に嘘をつかなかった、 140
 彼女は僕に言った、天使たちは
 この世にある最も美しい存在であると、
 あらゆる物よりもずっと美しい神を除いて。
 ここで僕は主なる神を見ている、僕はそう思う、 144
 何故なら、僕がそこで余りにも美しい一人を見つめているので
 他の者たちは、神が僕を御加護されるのと同様に本当に、
 美しさのうちの十分の一も持っていない程だ。
 また僕の母自身はこうも言った 148
 人は神を信仰し礼拝しなければならない
 そして跪いて崇めなければならないと、

それで僕はこの者を崇めるだろう、
 彼と共に他の全ての者たちを。」 152
 すぐに彼は地面に身を投げ出して
 そして彼の全ての信徳唱を唱える
 また彼が知っていた全ての祈りを、
 それを彼の母親が彼に教えていた。 156
 そして騎士たちの指揮官は
 彼を見て次のように言う。「お前たち後ろに下がっている、
 というのも恐れて地面に倒れてしまったから
 我々を見たあの若者は。 160
 我々が皆一度に行くならば
 彼の方へ、彼は抱くだろうから、私にはそのように思える、
 非常に大きな怖れを、それで彼は死んでしまって
 私に答えることは出来ないだろう 164
 私が彼に尋ねる如何なる事に対しても。」
 彼らは留まり、そしてその者は進み寄る
 その若者の方へ猛烈な速度で、
 それで彼に挨拶して心配することはないと彼に言明し、 168
 そして言う。「若者よ、怖れることはない。」
 「怖れてはおりませぬ、救世主にかけて」、
 とその若者は言う、「その方を僕は信じております。
 あなたは神ですか。」「いいや決して、真に。」 172
 「それではあなたは何方ですか。」「私は騎士だ。」 [b]
 「今まで一度も騎士というものを僕は知りませんでした、」
 とその若者は言う、「僕はそれについて誰も見たこともなかったし
 以前一度もそれについて語られるのを聞いたこともなかった、 176
 けれどもあなたは神よりもずっと美しい。
 僕が全く同じようであったなら、
 そんなにも輝かしくまたそんな姿をしていたら。」
 そう聞いて彼の近くに進み寄り 180
 その騎士は、そうして彼に尋ねる。
 「お前は今日この原野で
 五人の騎士と三人の乙女たちを見かけたか。」

- その若者はその他の物についての知識を 184
問いによって知り、尋ねようとする。
騎士の槍に自分の手を彼は伸ばして、
そしてその騎士を掴んで言う、「敬愛する殿、
騎士と言われるあなたが、 188
あなたが握っておられるこれは何ですか、」
「今や私は全く都合の良い時にきた、」
とその騎士は言う、「と私には思われる。
私はそのつもりだった、親愛なる君、 192
お前から消息を聞き知ろうという、
ところがお前は私から知りたがっている。
私はそれをお前に言おう、これは私の槍だ。」
「あなたはおっしゃるのですか、」と彼は言う、「人は槍を投げるのですか 196
僕が僕の投げ槍でするように。」
「いや違う、若者よ、お前は余りにも愚かだ。
そうではなくて人はそれで近くから突きかかるのだ。」
「それならばその一本の方がずっと価値がある 200
あなたがここで御覧になっておられるこれらの三本の投げ槍のうちの、
というのはどれくらい沢山僕が望もうとも僕はそれで殺すのです、
鳥たちや獣たちを、必要に応じて、
そしてまた僕は彼らをそんなにも遠くから殺すのです 204
人が大きな矢を放つことが出来る程の。」
「若者よ、私はこれを使うことは出来ないが、
けれどもその騎士たちについて私に答えてくれ。
彼らが何処にいるかお前が知っているかどうか私に言ってくれ、 208
そしてお前は乙女たちを見たのか。」
その若者は盾の下の部分において
彼を捉えて、明瞭に言う。
「これは何ですか、そしてこれはあなたには何の役に立つのですか。」 212
「若者よ、」と彼は言う、「それは欺瞞だ、
お前が私を別の話題に携わらせるのは
それを私はお前に尋ねてもいないし望んでもいないのだ。
私は思っていた、神明に誓って、 216

お前が私に消息を言うだろうと [c]
 お前が私から知識を聞き知る前に、
 そして私がそれをお前に教えることをお前が望んでいるとは。
 私はそれをお前に言おう、事態がどんな風に推移しようとも、 220
 というのは私は喜んでお前に同情しているのだ。
 私が手に持っている物は盾と言うのだ。」
 「それは盾というのですか。」「真に、」と彼は言う、
 「それを私は全く軽んじてはならないのだ、 224
 何故ならばそれは私にはまさかの時に全く不足はないので
 或る者が私に投げ掛けたり射掛けたりする時、
 あらゆる打撃に対して立ち向かっていく。
 それが私にしてくれるのはその務めなのだ。」 228
 それから後ろに下がっていたその者たちは
 道を辿りながらやって来て
 全速力で彼らの主君のところへ、
 そして彼らは彼に即座に言う。 232
 「殿、何をこのウェールズ人はあなたに言ったのですか。」
 「彼はあらゆる仕来りを全く知らない」、
 とその主君は言う、「神明に誓って、
 というのは私が彼に尋ねる如何なる事に対しても 236
 彼は決して然るべく答えない、
 そうではなくて彼が見る物は何であれ彼は尋ねるのだ
 それが何と言う名で何を人はそれであるのかと。」
 「殿、直ちに確と御分りにならなくては 240
 ウェールズ人は皆生まれつき
 牧場にいる獣たちよりもずっと愚かなのです。
 この者もまた獣と同じです。
 愚か者は彼のそばに留まる者のこと、 244
 下らない事をして暇をつぶしたり
 時を愚行で過ごそうとは思わないならば。」
 「わからない」、と彼は言う、「神かけて。
 私が出発してしまう前に、 248
 彼が望むであろう事は何であれ私は彼に言うだろう、

- 違った風に私は決してさらに先に進まないだろう。」
- それから彼はその若者にもう一度尋ねる。
- 「若者よ」と彼は言う、「お前は気を悪くするな、252
- 五人の騎士たちについて私に語ってくれ、
- そしてまたその乙女たちについても、
- お前が彼らに出会ったか或いはまた見たならば。」
- そしてその若者は捉えて離さない256
- 彼の鎖帷子の端を、そして彼を無理に引っ張る。
- 「さあ、僕に言ってください、」と彼は言う、「敬愛する殿、
- あなたが着ておられるのは何ですか。」
- 「若者よ、」と彼は言う、「お前は一体それを知らないのか。」260
- 「私は知りません。」「若者よ、これは私の鎖帷子だ、[362 a]
- それは鉄と同じくらい重い。」
- 「それは鉄でできているのですか。」「それがお前は良く見えるはずだ。」
- 「それについて、」と彼は言う、「僕は何も分かりません、264
- けれどもそれはとても綺麗ですね、神明にかけて。
- それであなたは何をなさってそれはあなたに何の役に立つのですか。」
- 「若者よ、それを言うのは容易い。
- もしお前が私に向かって投げたり268
- 投げ槍を、或いは矢を射掛けたりしようとしたら、
- お前は私に如何なる害も加えることは出来ないだろう。」
- 「騎士殿、そのような鎖帷子から
- 神が雌鹿たちと雄鹿たちを御護り下さいますように、272
- 何故ならば僕は何もそれで殺せなくなるだろうし
- 僕はもう二度と後ろからついて行けないだろうから。」
- するとその騎士は彼に答える。
- 「若者よ、主なる神にかけて、276
- きっとお前は私に何か言えるだろう
- その騎士たちとその乙女たちについて。」
- そうすると殆ど思慮分別のなかったその者は
- 彼に言う。「あなたはそんな風に生まれたのですか。」280
- 「いいや全く、若者よ、それは有り得ないことだ
- こんな風に何か或るものが生まれ得るであろうということは。」

「それでは一体誰があなたをそのように武装させたのですか。」
「若者よ、私はお前に誰であるかを確と言おう。」 284
「それを言ってください。」「勿論喜んで。
まだ全くすっかり五日も経っていない
この装備全部を私に御与えになってから
私を騎士に叙したアルトゥス王が。」 288
さあしかしどうなったか私に答えてくれ
ここを通過してやって来た騎士たちが、
彼らは三人の乙女に付き添って行くのだが。
彼らは並足で来ているのかそれとも彼らは逃げているのか。」 292
すると彼は言う。「殿、さあ御覧下さい
あなたが御覧になっているその最も高い森を、
それはその山を取り囲んでおります。
あそこにヴァルドヌの隘路²⁰があります。」 296
「それでそれがどうかしたのか、」と彼は言う、「親愛なる君。」
「あそこに僕の母の馬楯で耕作する農民たちがいますが、
彼らは彼女の領地を馬楯で均し耕しております。
そしてもしこの人たちがそこを通り過ぎた時、 300
彼らがその人たちを見たなら、彼らはそのことを言うでしょう。」
すると彼らは言うには、自分たちはそこへ行くだろうと
彼と供に、彼が自分たちをそこへ連れて行くならば、
燕麦畑を馬楯で耕しているこの人たちのところまで。」 304
その若者は彼の狩猟用の馬を連れて来て [b]
そしてそこまで行く、その耕作農たちが
鋤かれた領地を馬楯で耕しており
燕麦が種播かれているところへ。」 308
そしてその者たちが自分たちの領主を見た時、
彼らは皆怖れて震えたのである。
それで何故彼らがそうしたか汝らは御存じだろうか。
彼らが見た騎士たちのために、 312
その者たちは武装して彼と供にやって来たのであるが、
彼らはよく知っていた、もしその者たちが彼に
自分たちの身分と自分たちの本性を言ったなら、

- 彼が騎士になりたがるであろうということを、 316
そして彼の母親は怒りに我を忘れるだろう、
何故なら彼女はそれから彼を遠ざけるつもりだったからである
彼が決して騎士を見たり
彼らの職業を学んだりすることから。 320
そしてその若者は牛追いたちに言う。
「お前たちは五人の騎士たちと
三人の乙女たちがここを通り過ぎるのを見なかったか。」
「彼らは今日行くことを止めませんでした 324
この森を通して。」と牛追いたちは言う。
するとその若者は騎士に向かって
その者はそんなにも多く彼に話しかけていたのであるが
次のように言う。「殿、ここを通して通り過ぎて行きました 328
その騎士たちとその乙女たちが。
さあしかし僕にもう一度おっしゃって下さい
騎士たちを叙する王について、
そして彼が大抵引き籠もっているその場所を。」 332
「若者よ、」と彼は言う、「私はお前に言おう
王はカルデュエル²¹に居住しておられる、
そしてまだ五日にもならない
王がそこに御滞在になってから、 336
私もそこに居てまた彼を見たのだ。
そしてもしお前が彼をそこで見つけないなら
それをお前に教えてくれる誰かがきつといるだろう。
決してそんなに遠ざけられたりはしないだろう 340
お前がそこでその方について聞き知れないほど。
さてしかしお前が私に教えてくれることを私はお前に御願する
どのような名前で私はお前を呼べばよいだろうか。」
「殿、」と彼は言う、「僕はそれをあなたに申し上げます。 344
僕は親愛なる息子と言います。」「さてお前は親愛なる息子と言うのか。
私は確と思っている、お前がまだ持っていると
他の名前を。」「殿、誓って、
僕は親愛なる兄弟と言います。」「おまえの言うことを信じよう。 348

しかしお前が私に真実を言おうと思うならば、 [c]
 お前の正しい名前を私は知りたいのだが。」
 「殿、」と彼は言う、「確と僕は言うことが出来ます
 僕の正しい名前では僕は親愛なる殿と言います。」 352
 「誓って言うが、これは美しい名前だ。」
 「お前はの上もっと別の名があるのか。」「殿、僕は持っておりません、
 一度も確かに僕はそれについてもっと他の名前を聞きませんでした。」
 「神かけて、私は不思議なものを聞いた、 356
 それ以上に偉大な名前を今までに一度も聞いたことはないだろうし
 もう二度と聞くことはないだろうと私は思う。」
 直ちにその騎士は出立する
 全速の駆け足で、彼はとても急いだ 360
 自分が他の者たちに追いつこうと。²²

＊本稿は、昭和63年度文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)：『パルツィファル』写本とその古仏語原典写本における修辭的文体の実証主義的比較研究）〔課題番号63710274〕に基づく研究成果の一部である。

1) ここに訳出された作品は、Chrétien de Troyes: *Le Conte du Graal* (Perceval) の冒頭の361行である。当翻訳の底本としては、Lecoy, Félix (publié): *Les Romans de Chrétien de Troyes, édités d'après la copie de Guiot* (Bibl. nat. fr. 794) V, *Le Conte du Graal* (Perceval), en deux tomes, Paris 1981を主として使用した。この版が依拠している写本Aは、全8960行から成っている。更に、写本Aに依拠した規範的な原典批判版として Hilka, Alfons (Hrsg.): *Der Percevalroman* (Li Conte del Graal) von Christian von Troyes, unter Benutzung des von Gottfried Baist nachgelassenen handschriftlichen Materials, Halle (Saale) 1932を随時参照した。この版は全異本及び全写本の異文をほぼ含んでいる。また、Roach, William (publié): *Chrétien de Troyes, Le Roman de Perceval ou le Conte du Graal, publié d'après le ms. fr. 12576 de la Bibliothèque Nationale, Seconde édition revue et augmentée*, Genève, Paris 1959 (写本T)も適時参照した。この作品の抄訳である『聖杯の物語、またはペルスヴァルの物語』（佐々木茂美訳注、1983年、大学書林）は、この Roach 版に依拠している。その理由として、クレティアンが出身地のシャンパーニュ方言ではなく、当時の文学語としての francien を用いて執筆したであろうという説を挙げている。（佐々木茂美訳注、『前

掲書』、4-6ページ参照。) Roach も、クレティアンが最後の作品では、青年時代に用いた方言より、むしろ12世紀後半のフランスで通用していた共通の文学語を選んだと思われ、従って当時の文学語の特徴を担った *francien-picard* 方言で書かれている写本 *T*こそが、写本 *A* よりもその共通の文学語に近いと推論している。V. Roach, *ibid.*, p.X. これに対して、Lecoy はこの写本 *T*を《*un bon manuscrit*》(Lecoy, *ibid.*, tome II, p. 99.) としながらも、その規則性は大半がテキストの古い改訂に拠るもので、作品の表現の細部ではいささか精彩を欠いた版を生み出すものとして批判している。これら三種の校訂本を含めて、現在まで合計六種の校訂本が出版されているが (Potvin (1865-1871); Baist (1909/1912); Hilka (1935); Roach (1956); Lecoy (1981)), 詳細に関しては Roach, *ibid.*, p. VII sq.; Lecoy, *ibid.*, tome II, p. 98 sq. を参照せよ。また、クレティアンの >Le Conte du Graal< には、計15の写稿本の現存が確認されている。(以下の写本のリストは、Roach 版と Lecoy 版からの引用である。尚、()内は推定成立時期を示す。)

- A パリ、国立図書館、フランス・コレクション794 (13世紀の下四半期)
- B ベルン、市立図書館、354 (14世紀)
- C クレルモン=フェラン、市立図書館、248 (13世紀末)
- E エディンバラ、スコットランド国立図書館、19.1.5 (13世紀前半)
- F フィレンツェ、リッカルディアーナ図書館、2943 (13世紀)
- H ロンドン、紋章院、アルンデル14 (14世紀後半)
- L ロンドン、大英博物館、付加36614 (13世紀後半)
- M モンペリエ、医学部附属図書館、H249 (13世紀末)
- P モンス、公立図書館、331/206 (13世紀)
- Q パリ、国立図書館、フランス・コレクション1429 (13世紀後半)
- R パリ、国立図書館、フランス・コレクション1450 (13世紀前半)
- S パリ、国立図書館、フランス・コレクション1453 (14世紀)
- T パリ、国立図書館、フランス・コレクション12576 (13世紀後半)
- U パリ、国立図書館、フランス・コレクション12577 (14世紀)
- V パリ、国立図書館、フランス新取得物6614 (13世紀末)

2) これはフランスの諺である。V. Hilka, *ibid.*, *Berichtigungen und Anmerkungen* p. 615: Morawski, *Proverbes français*, 2074番: 《*Qui petit seme petit queut.*》(「僅かしか種蒔かぬ者は、僅かしか摘まない。」)

3) 《*dobles*》は基数詞を供って名詞として、さらに前置詞《*a*》を供い、「百倍

の」《*hundertfach*》の意味で用いられている。V. TL, tome 2, col. 1972. 新約聖書『ルカの福音書』8, 8 : 《*Et aliud cecidit in terram bonam: et ortum fecit fructum centuplum.*》(Nestle, Eberhard (Hrsg.): *Novum Testamentum Graece et Latine*, London 1963²⁵, p. 167.)に類似の表現が見られる。Cf. Hilka, *ibid.*, p. 615 sq.

4) この作品の著者 Chrétien de Troyes (1135? ~ 1190年頃) は、中世フランス宮廷文学の最大の作家の一人である。彼の作品として、>Philomena<, >Péllops<, >Tristan<(消失), >Érec et Énide<(1170年), >Cligès<(1175/76年), >Le Chevalier à la Charette<(1178/79年), >Le Chevalier au lion<(1177/80年), >Guillaume d'Angleterre<(1180年), >Le Conte du Graal<(1179/82~90年)が挙げられる。クレティアンの作家としての活動時期は、凡そ1160年から1190年頃と考えられ、この>Le Conte du Graal<はクレティアンが庇護者 Philippe d'Alsace から《livre》(「原典」)を受け取ったであろう1179/82年頃から Philippe が第三回十字軍へ出発した1190年9月より以前にかけて成立したと見做されているが、未完に終わっている。クレティアンの最初のパトロンは Marie de Champagne (1145~1198年、フランス王 Louis VII と Aliénor d'Aquitaine との娘で、シャンパーニュ伯 Henri I と結婚)であり、彼女の母 Aliénor 同様、騎士宮廷文化の保護に努めた。それからこの作品の依頼者でもあるフランドル伯 Philippe d'Alsace (1143? ~ 1191年) が彼を庇護した。Cf. Frappier, Jean: *Chrétien de Troyes*, Paris 1968, p. 5 sq. et p. 169.; Poirion, Daniel: *Précis de littérature française du Moyen Age*, Paris 1983, p. 389.; Ennen, Edith: *Frauen im Mittelalter*, München 1984, p. 125-128, p. 237, p. 287 sq. et p. 295.; Payen, Jean Charles: *Littérature française, tome 1, Le Moyen Age*, Paris 1984, p. 261, 265.; Gier, Albert (übers. u. hrsg.): *Erec et Enide, Erec und Enide*, Stuttgart 1987, p. 416 sq.

5) フランドル伯及びアルザス伯フィリップは1143年頃アルザス伯ティリーの長男として生まれ、1168年に政権を執り、1177-78年に聖地への最初の遠征、1190年に二度目の十字軍参加(第三回十字軍)を果たし、アッコン包囲中に1191年6月1日ペストが原因で没する。Hilka に拠れば、この作品の prologue における伯爵フィリップとアレクサンダー大王との比較の個所は、フィリップの若い時期に関連して言及されている。Cf. Hilka, *ibid.*, p. 616.

6) 西洋中世においては、アレクサンダー物語の影響によって、アレクサンダー大王は物惜しみの無さの象徴として(Érec 2269)、さらには「気前の良さの宝と鑑」《*Hort und Muster der largesce*》(Hilka, *ibid.*, p. 616)として語り継がれてい

る。Cf. Hilka, *ibid.*, p. 616.; Shitanda, So: >Das Alexanderlied des Pfaffen Lamprecht<(Straßburger Alexander), — Japanische Übersetzung und Kommentar (1), In: Bulletin of the Faculty of Liberal Arts, Nagasaki University, Humanities, Vol. 28, No. 1, Nagasaki 1987, pp. 33–44.

7) ここでもまた *largesce* のテーマが扱われている。V. Érec 4642, 6667, Cligès 192–217. Cf. Hilka, *ibid.*, p. 617.

8) 新約聖書『マタイの福音書』6, 2: 《Cum ergo facis eleemosynam, noli tuba canere ante te, sicut hypocritae faciunt in synagogis, et in vicis, ut honorificentur ab hominibus》(Nestle, *ibid.*, p. 12). Cf. Hilka, *ibid.*, p. 617.

9) 新約聖書『マタイの福音書』6, 3–4: 《Te autem faciente eleemosynam, nesciat sinistra tua quid faciat dextera tua, ut sit eleemosyna tua in abscondito, et pater tuus, qui videt in abscondito, reddet tibi.》(Nestle, *ibid.*, p. 12). Cf. Hilka, *ibid.*, p. 617. 聖書では手は「供与を示すイメージとして」(Lurker, Manfred: Wörterbuch biblischer Bilder und Symbole, München, 1978², 池田絃一訳『聖書象徴事典』、1988年、人文書院、257ページ) 現われ、右と左は「対立概念」(モーセ第一書)あるいは「対極概念として、ついには善と悪の象徴にもなる。」神の右手は「力と支配の象徴」(ルルカー、『前掲書』、347ページ)であり、右手は「優越的な手」として、「成功と幸福」(ルルカー、『前掲書』、346ページ)が期待される。

10) 9) の註に準ずる。《biens》s.m. は「善行」《Gutes》または「道徳的に善き行ない」《das moralisch Gute》の意味で。V. TL, tome 1, col. 966 sq.

11) 「左手は不器用」であり、象徴的に見て「不幸をもたらしかねない。」(ルルカー、『前掲書』、346ページ。)ここは、「聖書の注釈者に拠れば」の意味。Cf. Lecoy, *ibid.*, tome II, Glossaire, p. 147.; Hilka, *ibid.*, p. 617.

12) クレティアンによる聖書出典の指示箇所は間違いであり、実際の箇所は『ヨハネの手紙 第一』4, 16である。《Deus charitas est: et qui manet in charitate, in Deo manet, et Deus in eo.》(Nestle, *ibid.*, p. 605). Cf. Hilka, *ibid.*, p. 617.; Ribard, Jacques (traduit): Chrétien de Troyes, Le Conte du Graal (Perceval), Paris 1983, Notes, p. 171.

13) 《delivre》はここでは再帰動詞として「果たす、履行する」《sich entledigen》の意味で用いられている。V. TL, tome 2, col. 1344. 第1行–68行までが、この作品の prologue を形成しているが、殆どフランドル伯フィリップへの献辞によって占められている。騎士道の理想が称揚されるが、そこでは「現世の栄光が

キリスト教的謙虚さと神への愛のために目立たなくなる。」(Frappier, Jean: *ibid.*, p. 170.) Frappier は prologue に対応する小説の本文のエピソードとして、特にペルスヴァルが宗教的回心を行う聖金曜日と隠者の庵のシーンを挙げている。(V. Frappier, *ibid.*, p. 170 sq.) また Dragonetti は、パトロンであるフィリップと作者の間に循環的關係を認め、パトロンの賛美が自己賛美につながるとし、更に第63行の *conte (récit)* と第64行の *côte (comte)* の同形異義語のレトリックから、フランドル伯 = 《*conte de Flandre*》, 物語 = 《*comte du Graal*》という意味論的交錯が生じる、とする。V. Dragonetti, Roger: *La vie de la lettre au Moyen Age*, Paris 1980, p. 111 et p. 117-119.

14) Hilka に拠れば、このような自然描写の書き出しは *chansons de geste* の冒頭の技巧に由来している。V. Hilka, *ibid.*, p. 618.

15) *an lor latin*: 文字通りには「彼らのラテン語で」となる。つまり、小鳥の囀りがラテン語に置き換えられている。Cf. Lecoy, *ibid.*, tome II, *Glossaire*, p. 153.; Hilka, *ibid.*, p. 618.

16) 直訳すれば「荒涼とした森」の意味となる。ペルスヴァルの母親の「館」《*demeure*》(Roach, *ibid.*, *Index des noms propres*, p. 306) または「居住地」《*résidence*》(Lecoy, *ibid.*, tome II, *Table des noms propres*, p. 126); 《*Wohnsitz*》(Hilka, *ibid.*, *Namenverzeichnis*, p. 805) であり、そこでペルスヴァルは少年時代を過ごしたのである。

17) 604行以下で、これがウェールズの慣習であると説明される。V. Hilka, *ibid.*, p. 618.

18) Wolfram von Eschenbach の *>Parzival<* では、騎士の数は3人に変更されている。120, 25: 《*drî ritter nâch wunsche var, / von fuoze uf gewâpent gar.*》(Lachmann, Karl (Hrsg.): *Wolfram von Eschenbach*, Berlin, Leipzig 1926^o, *Nachdruck* 1965, p. 67.)

19) 第130行の後で、*BCHTV (=A)* を除く他の写本は、補足的な次の2行を含んでいる。《*Et les lances et les escus / Que onques mes n'avoit veüz,*》(「そして槍と盾を、それらを彼は今までに一度も見たことはなかったが、」)(Lecoy, *ibid.*, tome II, *Variantes*, p. 107.); Hilka, *ibid.*, p. 6.

20) ペルスヴァルの母親の居住地の近くにある山岳の小道。V. Lecoy, *ibid.*, tome II, *Table des noms propres*, p. 129.

21) アルトゥス王の居住地のうちの一つ。841行の《*un chastel sor mer asis*》(「海辺に位置する城」)によって、より詳しく記述されている。Cf. Lecoy, *ibid.*,

tome II, Table des noms propres, p. 125.; Hilka, *ibid.*, p. 621.

22) 第1-361行までの物語の区切は、主として Hilka 版及び Lecoy 版に従った。両版とも写本Aに依拠している。従って、「プロローグ」（第1-68行）、「ベルスヴァルと騎士たち」（第69-361行）という小見出しを与えることができよう。

- * 略号 TL Tobler, Adolf; Lommatzsch, Erhard: *Altfranzösisches Wörterbuch*. Adolf Toblers nachgelassene Materialien, bearbeitet und herausgegeben von Erhard Lommatzsch, *Membre de l'Institut de France*. Von der 25. Lieferung an mit Unterstützung der Akademie der Wissenschaften und der Literatur (Mainz), 10 Bde. Wiesbaden 1925-1976.